

Title	第2回フォーラム 地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？ ～京都市立御所南小学校の事例～
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 153-175
Issue Date	2012-02-23
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25803
Rights	

琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

第2回フォーラム

地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？

きょうとしりつごしよみなみしょうがっこう
～京都市立御所南小学校の事例～

と き：平成 23 年 10 月 29 日（土）15：00～17：30

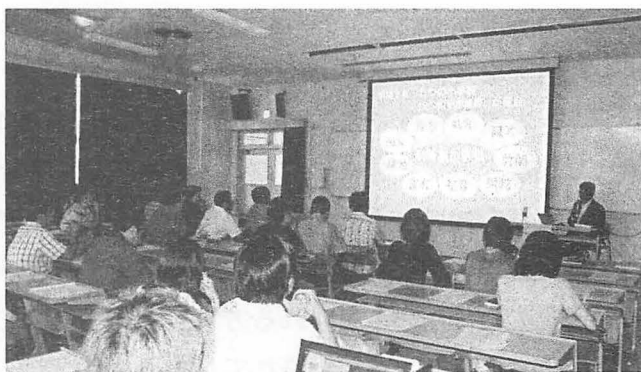
場 所：琉球大学 法文学部 201

講 師：竹内 知史氏（京都市立御所南小学校校長）

昭和 34 年生まれ。京都教育大学教育学部卒。京都市立藤ノ森小学校、龍池小学校に着任後、平成 7 年に御所南小学校教諭。平成 19 年に同校教頭を経て平成 22 年より現職。地域との連携・協働を目指した地域学校協議会「御所南コミュニティ」の運営に尽力し、地域運営学校（コミュニティ・スクール）の実践を図る。



▲竹内氏



▲フォーラムの様子

第1部 講話「地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？～京都市立御所南小学校の事例～」

竹内 知史氏（京都市立御所南小学校校長）

みなさんこんにちは。今日は、沖縄のほうまで呼んでいただき、新しい土地に出会わせていただきまして、本当にありがとうございます。1月の末に前城さんたちが本校に学校訪問してくださり、実際にお話させてもらったり、「御所南コミュニティ」（地域学校協議会。学校と地域・保護者をつなぐ組織。3委員会 10 部会で構成）の会合を見学いただきました。そういうご縁で今回呼んでいただけることになりました。本当は今年の夏に来る予定だったんですが、台風が停滞しまして、なかなか飛行機が飛ばなかったということで、私の方も残念だなと思っていたんですけども、「ぜひとも別の機会に」というご依頼を受けしまして、ご要望にお応えしまして日程を調整して今回来ることができました。どれほどきちとしたお話を伝えられるか責任を感じるんですけども、宜しくお願いします。

これから話をさせてもらいますが、学校側の立場の話が多くなると思います。地域と学校が連携・協働した学校づくりをするということに関して、どのようなお互いのアプローチがあるのか、そして両方にメリットがあるような運営であるべきではないかなと思っているんです。コミュニティ・スクールについて文科省のほうから色々と「こういうのがコミュニティ・スクールですよ」ということはあるけれど、地域との連携・協働というのは、それぞれの地域と学校によって違うと思うので、それぞれが独自

のコミュニティ・スクールを、それなりに創造していけばいいのではないかなと思っています。

本校は平成14年に全国の指定を受けて、7地域9学校の指定の中に入りました。そのとき、コミュニティ・スクールとは何ぞや、という中で始まったので、ちょっと構えて作ってきた経緯はありますが、やっぱり本校は本校なのでできる範囲の中でのコミュニティ・スクールを目指している、ということが大前提ですので、今日聞いていただいて、「あ、こういうことなら少しずつやっていける」とか、「これならやれるな」というところを見つけていただければ、非常にありがたいです。

レジュメをお配りしてありますが、ちょっとプレゼンと進行状態が合わないところがあると思います。その都度レジュメの番号を言いながら、中心はプレゼンのほうで進めさせていただきたいと思いますので、宜しくお願いします。

お配りした『平成23年度学校要覧』に学校教育計画表があると思います。その中に地域と一緒に作った目標なんですが、「夢がひろがる地域の学校」とあります。「夢がひろがる地域の学校」を作っていきましょう！というふうに言っています。夢というのは、もちろん子どもが持つ夢でありますし、保護者が子どもに抱く夢でもありますし、地域が学校に対して、それから地域自身に対して思う夢もあります。教職員の夢もあります。そんな学校の夢の実現が広がっていくような地域の学校でありたいというのが、大きな大きなコンセプトになっています。

まず、本校の特色です。本校は、平成7年に開校しました。5つの小学校（梅屋・春日・龍池・竹間・富有）が統合してできた学校です。その創立が明治2年で、当時は「番組小学校」と呼んでいました。みなさんご存知のように学制の発布が明治5年ですので、行政が作った学校ではなくて、いわゆるこの時から「地域の学校」と言ってもいいかなとも思います。明治になり、天皇が東京に遷都し、それに伴って天皇のための仕事をされる方も東京へこぞって移動されたんで、京都の人口がガタッと減っていったんです。これじゃあ街が廃れてしまう。今は市民と呼んでいますが、当時町衆と呼ばれていた人たちが、どうしていこうか、と。京都はこのまま廃れていってはいけない、復興しなければならない、と。まちづくりは人づくりであるというふうに捉えて、これからのまちづくりを担っていく子どもたちの教育にかけましょう、ということで学校を建てたと言われています。

その5つが統合する前には9つの小学校（梅屋、春日、城巽、龍池、竹間、銅駝、初音、富有、柳池）がありました。京都にできた64の番組小学校のうち、9つが本校の基の学校となります。9つのうち、城巽、初音、柳池という学校は中学校に変わり、銅駝という学校は中学校になって、今は美術高校になっています。そして、残った小学校にそれぞれが編制していったわけです。

この9つの小学校区は、5つの小学校区になっても地域自治は9つのままです。この学区のまま地域自治は行われていますので、その学区を中心にやっているところを京都では「自治連合会」と呼んで、その会長さんが自治連合会長として地域自治を進めておられます。その方たちが、9人。他の小学校では1小学校区1自治区ですから、1人の自治連合会長さんと連携をしながら地域と学校の連携を進めていったらいいんですが、本校はそういうわけにはいかずに、9人の自治連合会長さんと一緒に学校を連携・協働していくということになっているわけです。これをまずご理解いただきたいと思います。

平成9年に当時の文部省の研究開発学校の指定を受けまして、総合的な学習を中心とした教育課程の編成という研究に取り組みました。平成9年から3年間の指定だったんですが、2年間の継続指定を受けて合計5年間、つまり平成14年の総合的な学習の時間が全面実施される前の年までの5年間を研究開発学校として指定して取り組んできました。

今見ていただいている写真が本校の総合的な学習の二単元あるうちの1つを紹介しています。地域を主題とした総合的な学習で、3年でしたら「京の町再発見!」ということで京都の魅力を感じていくような題材です。この写真は京都の料理旅館さんを訪問させてもらって、おもてなしとかそういうところを体験させてもらっているところです。

それから、4年生が水をテーマにしています。鴨川の源流に行って、鴨川の始まりを見学に行っている写真です。また、祇園祭が京都の3大祭りの1つなのですが、本校の地域の祭りです。もったいないことに、この単元が始まる前に子どもたちに祇園祭のイメージを聞くと、夜店で物を買うとか、歩行者天国で歩いてみんなで喋って帰るとか、ほとんどが普通の祭りと変わらないイメージでしか祭りを見ていないのでびっくりしました。ほことかお囃子とか出てくるのかと思っていたら、4年生までの経験というのはそういうものなんですね。実際に祇園祭のお囃子の方に体育館に来ていただいて、ほこの上でしか見られないような経験を生で聞かせてもらう中で、祭りに携わる人たちの想いや願いを聞いて、祇園祭を誇りに思うような、祭りへの意識の変革みたいなことをしています。

6年生では、本校は伝統文化に携わる方々がたくさんおられるので、その地域人材を活かして、伝統文化の勉強をしています。伝統文化はその年によって違うんですが、魂を探るとか、子どもたちがそういう課題を立てまして、弟子入りをしていきます。15の伝統文化に携わる方に学校に来ていただいて12名から15名のグループを組んでいきます。左側は箏曲ですね。右側は小鼓。このお師匠さんは最初はこの方のお父さんが来ていただいたんですが、代替わりをしまして、本校の卒業生が継いでいます。京人形も本校の卒業生が師匠として代替わりで来ていただいています。伝統文化を伝承し、また後輩に教えるというような形になってきています。

平成9年からこのように学校に地域の方が参加してお手伝いしていただいて、授業と一緒にしていただいている。この段階では、まだ学校が「このような授業をしたいので、こんなことを子どもたちにお願ひします」というお頼みをして協力してもらっているというような形でした。主に総合的な学習の時間として来ていただいているんですが、かれこれ5年間の取り組みの中で200の方が子どもたちの授業に参画していただいています。これを「コミュニティ・ティーチャー」と呼んでいます。この総合的な学習のおかげで、地域の方が非常に学校に足が向いたり、入りやすい状況になってきているというのは、実はコミュニティ・スクールを創造していくベースになっているんです。その時はまだ、そこまでつながっているという実感はありませんでした。総合的な学習を5年ほど先にやらせてもらい、全国より先駆けてより良い総合的な学習ができるな、ということで平成14年を迎えることになります。

では、御所南コミュニティの概要についてお話します。レジュメのほうに「御所南コミュニティは何をしているの?」とありますが、実は「共同事業」と「共同授業」というのを2つに分けていまして、共同事業というのは、主に放課後に子どもたちの色々学びの裾野を広げていくような体験的な学習をお願いして企画して実施してもらっていて、共同授業というのは、授業の教科の内容と合致するところに授業を構築してもらって、一緒にカリキュラムを組んで行っています。そうすることによって、学校運営に関わって御所南コミュニティとしての話をしてもらったり、学校の理解を得るだけではなく、こういう体験的な授業・事業と一緒に作るということが大きなところなんです。どうしてもコミュニティ・スクールというと、学校運営協議会など、学校運営に携わることで学校の教育方針に対して物を言うとか、批判にとらわれがちです。確かにそういう側面もあるんですけど、私たちの学校のコミュニティ・スクールの考え方は、子どもに直接ダイレクトに入るような取り組みでなければならないのではないかと、

ということです。やはり具体的な活動、具体的な子どもの姿を見てもらい、実際に子どもの授業を考えてもらおうと、子どもの動きも分かってもらえるし、子どもの実態も目の当たりにします。御所南コミュニティは何をしているのか、と言われたら、「子どもが経験する・体験していくようなことを考えて、実際に実施していますよ」ということです。

その最も大きな事業が子ども体験ランドです。これは防災をテーマにした事業で、子どもにいざ何かあったとき、災害があったときのために、色々な体験をしてもらいます。開校前の平成7年には阪神淡路大震災があり、その後中越地震がありました。中越地震があったときに、やっぱりこれは京都でも考えていけないといけない問題だということで防災をテーマに取り組み、そして色々な地域の各種団体さんにご協力いただいているんです。

こういう1つのことをするとき、色々なボランティアの方に参加してもらうことが大きいことで、たくさんの人に子どもたちを見てもらう。また、単独でやるのと組織的にやるのとは違ってくるんですね。これを単独でやりますと、連携をとっていくのに時間がかかりますし、各種団体への声など学校側としても非常に労力がかかります。

御所南コミュニティの組織の中に、ボーイスカウトの代表の方が入っていただいているとか、それから消防団の方であつたり社会福祉協議会の方だとか、地域の諸団体さんにたくさん入っていただいています。そういう方たちに、「こういう体験学習をするんだけど、何か1つのブースを考えていただけませんか？」と一度に投げかけると、この会議に参加してもらっていますので、ワーストと考えて動いていただけなんです。そして10個くらいのブースが一気に出来上がって、子どもたちは2時間半の間に色々な体験を経験することができるんです。そんなに連絡をしなくても、組織の中にそういう方たちがいますので、組織の中で考えてもらって、その方たちの出て来られる方が一緒に手伝ってもらえるわけです。

レジュメに1200名参加と書いてあるのは、子どもだけの人数じゃなくて、大人も全員含めています。15時から18時までの3時間に1200名が参加。一同に会するわけです。子どもはだいたい500人くらい。本校の児童数が1190名いるんですが、約半数がこの土曜日の15時から18時に参加します。PTAのボランティアの方がだいたい150名。あと、諸団体さんとか色々な大人の方を入れて1200名が、こう一同に会していくわけですね。この体験学習で、組織力というか地域の一体感というのが得られるんです。これは子どもにとってとっても幸せなことだと思います。

みなさんご存知のように3月11日の東日本大震災が起こったときに、やはり学校が避難場所になり、そして復興の核となっていくわけなんです、その時にやはり地域のつながりが非常に大事であるということが言われています。これをするにあたって、これだけの方が動いていただけというのが、見て実感して分かるわけです。子どもの中に安心が生まれるんですね。それと、普段なら顔を合わさないような9学区の体育振興会の方とか社会福祉協議会の方とか連合会長さんが、ここで顔を会わされて会話を交わされるわけです。そこに子どもも入って行って同じブースに地域の方、保護者の方がボランティアで運営をされているわけです。そこで、ボランティアをしながらの会話が生まれるわけですね。そういう一体感のつながりを事業を通して持てるということが、つまりは地域のつながりであり、学校と地域のつながりであるということが、実感できるということです。これがいつもできるというわけではないんですが、こういうことを小さいながらも企画をしていくことでつながっていこうというふうに考えています。これが大きなメインの事業です。

では、御所南コミュニティを運営していくための組織とはどういう組織なのか。『御所南コミュニティ

たより vol.9号』というのをお配りしているんですが、そこにこれまでの組織、3委員会12部会が載っています。毎年3月にこのコミュニティたよりを出して、一年間こうやって頑張って活動してきたな、ということをお互いに充実感を持つという意味で必ず発行しています。

3委員会の1つに「地域コミュニティ委員会」というのがあります。また、平成14年に御所南コミュニティを発足したとき、小学校の統合は早かったんですが、中学校の統合がまだできておらず、コミュニティ・スクールの指定を受けた1年後の平成15年に統合しました。幼稚園も平成14年に統合しています。それで、幼小中の連携を深めるという課題が出てきたので、それを一つの委員会に持ちました。「幼小中コミュニティ委員会」です。また、もっと保護者との連携を深めていこうということで、「スクール・コミュニティ委員会」という委員会を設けました。そしてそれぞれの委員会に連携の課題を深めていくための観点を4つずつ持っていました。例えば、「地域コミュニティ委員会」では「文化」「福祉」「スポーツ」「まちづくり」のこれら4つの観点です。他の委員会もこのように4つずつ観点を設けました。後ほど詳しく説明します。

10年目に際して、やはり10年間経つと子どものニーズが変わったり、この組織で本当にいいのかという見直しであったりとか、メンバーも変わってきますので、今年、組織替えをしました。3委員会10部会になっています。まず、幼小中が今年で役割を終えたと確信しましたので、幼小中コミュニティ委員会から「学び支援コミュニティ委員会」に変えています。というのは、このコミュニティ・スクールを平成14年に始めてから、平成15年に3つの中学校が統合して京都御池中学校という中学校になって、高倉小学校と共に1中2小の関係になりました。これまでは御所南小学校から3つの中学校に進学していましたので、なかなか連携がしにくかったんですが、この高倉小学校も京都池中学校も地域運営協議会を持つ学校として指定されたので、ともにコミュニティ・スクールを推進する学校として、小中連携をしていくようになるんです。そこから平成18年に小中一貫教育として指定され、平成20年には文部科学大臣から小中一貫教育校として指定されていますので、ある程度、小中一貫教育が学校体制の中でできています。幼小中のコミュニティとしての役割は終えたということで、学校運営協議会としては連携はとっているんですが、一応変えました。授業に関わってもらう「学び支援」という授業ボランティアを中心とした委員会組織に意味づけを変えました。

それから、部会を12から10に減らした意味は、これは委員さんの整理をさせてもらいました。10年の中で少しずつ交替をしてもらっていたんですが、1年ごとの任期ではあるんだけど、なかなか辞めづらいということがありました。自分の子どもは小学校を卒業したのでそろそろ・・・、ということもあったんだろうけど、なかなか辞めるきっかけがなかった。そういうこともあったので、この部会を少し減らして人数を精選していくことで一度シャッフルして生まれ変わっていこうというふうにしました。

3委員会10部会の活動を簡単に紹介しようと思います。詳しくはレジュメの組織図に書いてあるんですが、まず地域コミュニティ委員会の文化部会では、ものづくりの職人を訪ね、体験をさせてもらい、京都の文化を実感してもらうことで地域へ誇りを持つ心を育てようとしています。この写真は、地域にもものづくり館という施設があるので、そこに見学に行って教えてもらっているところです。

それから福祉部会では、「子どもとお年寄りとのふれあいデー」というのをやっています。これは体育館に180名のお年寄りの方と、子どもたち240名が一同に会して、1時間半の交流を行うんですが、実はこれは御所南コミュニティができる前からあった行事なんです。高齢化社会と言われる中、本校の地域にもたくさんのお年寄りの方がおられたので、子どもと触れ合ってほしいという社会福祉協議会の要

請で毎年1年に1回行われていました。これを御所南コミュニティができたことによって福祉部会に位置付けました。部会ができる前から、普段から社会福祉協議会の方と民生児童委員の方とその組織の方が入って、この取り組みに対してこう進めていこう、教職員も一緒になって進めていこうと、何回か会議を持っていたんですね。しかし、部会の中で話し合いができるようになって、労力と時間が短縮されました。どこにでも小学校や地域が取り組んでこられた行事などがあると思います。そういったものを単独でそれぞれバラバラにやるんじゃなく、お互い協力できるところは協力することでの組織を中に位置づけると、その打ち合わせの労力だったり、ボランティアの獲得というのを割とスムーズに進めることができる。PTAも行事やイベントをたくさんやられると思うんですが、それも御所南コミュニティの中に位置づけて、主に御所南コミュニティの授業として展開して、地域もPTAもその行事・イベントに対してみんな協力して行う。本校はPTAの単独行事というのはほとんどしていません。御所南コミュニティの行事として位置付けています。何も一から何かを考えていくのではなく、あるものをもう少し上手く実施できないかというように考えていくと、やりたいことができるのではないかと思います。その大きな一つが「お年寄りとのふれあいデー」です。

野外活動・スポーツ部会というのがあります。これはスポーツ活動をしてもらっているんですが、例えばミニミニ運動会といって学校の運動会ではできないような運動を体育振興会の方を中心に作ってもらっています。縦割りで1年生から6年生までグループを組んで、それが1つのチームとして8チーム作って競い合うとか。それから、学校の運動会ではなかなか食べ物を使った競技というのはいませんが、ドーナツ食い競争というようなのを企画してもらって、子どもたちにそういう楽しみを与えています。運動会よりも小規模な運動会なんですが、参加人数はミニミニではなくて、500名くらいです。とってもミニではないですけど、午前中の3時間をこういうふう楽しんで活動しています。

また、まちづくり部会から地域歴史部会へ変わりました。これには地域の方の思い入れがあります。子どもは御所南小学校に通うけれども帰るのはそれぞれの9学区の学区に帰ってくるんだ、という意識なんですね。御所南小学校であっても9学区のどこに住んでいるかを意識させてほしい、と。そういう願いを受けまして、今年この9学区のそれぞれの地域の歴史を子どもたちに学ばせています。9つの学区の地域特色にはどんなものがあるのか子どもたちにどんどん浸透し、きっとまちづくりに関わっていくと思っています。この写真は京都国際マンガミュージアムで餅つきをしているところです。もともと龍池小学校の跡地に京都国際マンガミュージアムという施設ができました。そこを龍池学区は大事にされていて、その施設を見学しに行くという企画のときに、ちょうど龍池学区の地域の人がやっている餅つき大会の日に合わせて、見学と餅つきの行事を合体させるんですね。子どもたちは、見学もできるし餅つきもできるということで大喜びなんですが、地域の方は龍池学区に住んでいる子どもだけじゃなくて、ここにたくさんの子どもたちが活動してくれることを本当に喜んでおられます。町の活性化としてここで地域の方と子どもが触れ合うことができるんです。町の活性化というところでの双方向のプラス面が位置付けられるわけです。地域の行事と御所南コミュニティの行事を上手く結びつけながら、地域の特色を上手く掴んだり、地域の方と直に触れ合っていくことを課題にした取り組みを、この地域コミュニティ委員会では主にしているということです。

次に、学び支援コミュニティ委員会の3部会では、それぞれ独自のボランティアを持っています。4月にボランティアを募集します。例えば国際部会は、英語の授業に来てもらう方を募集して豊かな英語活動をしてもらうようなボランティア組織を持っています。本校では平成13年から英語活動の時間を取

っていて、1、2年生からやっているの、最後には5、6年生と同じ時間数です。外国語教育は小中一貫で9年間ずっとつないでやっています。特に1年生の英語活動、英語遊びにたくさんのボランティアの方に来ていただいて授業してもらっています。

コンピュータ部会もボランティアさん、サポーターと呼んでいるんですけども、木曜日の14時から16時の放課後の間で開講いただいて、教員ノートタッチでコンピュータ室の開放をしてもらっています。年に3回はワークショップを開いてもらって、年賀状作りとか名刺作りを行って助かっています。25名くらいがサポーターとして登録をされています。

それから図書館部会。これが一番活発なんです、ブックメイトさんという85名の登録がありまして、月水木の14時から16時の放課後、図書館を開館してもらっています。それから放課後開館のない火曜日と金曜日の昼休みにもお手伝いをしてもらっています。85名の方が3ヶ月に1度の割合で済むというふうにしているので、そんなに負担をかけずにやっています。それからもう1つ良いのは、本の読み聞かせをしてもらっているんですが、図書館ボランティアの中には子どもの前で読み聞かせをするのが恥ずかしい方、苦手な方もおられるんですね。その方たちに無理やり全員読み聞かせをしてください、ではなくて、本は好きだけでも人の前に立つのは苦手だなという方たちには本の修復とか本の整理に当たってもらいます。図書館ボランティアでもたくさんの活躍の場があって、できるだけ一緒に無理なく自分の好きな仕事を図書館でしてもらって、無理なく役割を果たしてもらっているというのがとても良いところかな、と思っています。でも基本はみんな本好きだから図書館のボランティアをされています。

次に、保護者と連携・協働するスクール・コミュニティ委員会の3部会についてです。芸術部会では、芸術的な分野に子どもたちの経験や学びを広げていこうということで色んな芸術に携わる本物の方に来ていただいて、授業と連携していくことです。書道の先生に来ていただいて、「春」というイメージを自分はどうイメージして書くかということをしてもらったり、また、日本舞踊の先生に来ていただいて春の小川という曲を流しながらそこで振り付けをして3年生が日本舞踊を踊ったりとか、そういう表現活動です。今年は新たに音楽鑑賞を考えてもらったりしています。

健康・安全部会は、もともと健康部会で、健康について保護者の方々と色々活動してもらっていたんですが、最近はやはり安全面ですね。自転車での事故が増えてきて、登下校も含めて考える機会を設けてほしいという願いが保護者会にこの10年間で変わってあったので、児童数も増えたということもあって、健康・安全を考えてもらえる部会に編制をしました。例えば、木曜日の放課後15時から16時までの間、健康・安全部会の人たちと外で遊びます。自由参加なんです、縄跳びをしたり、フォークダンスをしたり、転がしドッチをしたりして、その時々で企画で外で遊ぶという活動をしてもらっています。

それから、やはり環境というのも家庭との協力なしでは守っていくことができません。環境の側面から、家庭と学校との連携を図って、自然の良さを知っていく活動をどんどん企画してもらっています。この写真は、京都で御所があるんですが、そこに行つての自然観察です。鴨川に行つての自然観察。実は今日も朝9時からこの環境部会の取り組みで、竹細工を作る活動をしています。自然のそういうものを大事に使いながら活動しています。

以上のような3委員会10部会の取り組みをしています。各部会には様々なボランティア組織が接続しています。例えば、文化部会には「PTA 教養文化部」や「女性代表」、「9学区自治連合会」が関わっています。PTAの専門部については学校によって違うかもしれません。みなさんのところではPTAの組織の中にクラス委員って選びますか？本校では1クラスの中に4名の方を選んで、立候補とか選挙でやり

たい方が来られるんですけど、その方たちが4つのPTA専門部に分かれて活動をされます。その一つが教養文化部で、広報部、保健体育部、地域環境部があります。この4つをそれぞれの10部会に位置づけてあります。なぜ、位置づけてあるかという、例えば文化部会でものづくり名人を訪ねようという取り組みがあったときに、引率にPTA教養文化部から何人か出ていただいて、一緒にその活動のボランティアをしていただきます。また、女性代表さんも参加します。また、9学区から1人回り持って9年に1回1人出てきてもらう。そうやって保護者と地域の方が顔を合わせて子どもの引率をして、ものづくり名人を子どもだけではなくて引率された方も楽しむというような機会を多く取っているんです。つまり、先ほども言いましたように、保護者と地域と学校が連携・協働するという場所を、子どもの活動を真ん中に据えてたくさん作っていきます。そのために、こうやってボランティア組織をいくつも位置づけています。これまでの組織を活かして位置づけています。そういう組織を作ることで、お互いの活性化を図っていくんです。

では、レジュメ2番目の「御所南コミュニティの誕生」について。ここも重なるところもありますが、御所南コミュニティは、「子どものために」というのを合言葉にして、運営面の研究ではなく、子どもの実際の活動を変えていく、力に変えていくための組織としてやっていきたいと思いますということで立ち上がりました。子どもの学びの支援をしていく、それから授業の支援をしていく、活動の支援をしていくというのが発想としてあります。

それから、説明責任として「学校評価」を位置づけているんですが、よく言われるのは「学校評価と言うても分からへん」ということです。でもありがたいことに、「私たちができることやったら、100%やらせてもらう」というのがこの地域の方たちの意識なんですね。明治から続いている「自分たちの学校」とあるという意識なんです。ですので、こういう活動を考えて、ボランティアとしてやっていただくというのを明確にして、話し合う内容も明確にすると、「分かった」とやっていただいているわけなんです。そして後から、「じゃあ子どもを見ていただいたので、子どもについてどう思われますか？」ということ話を話し合いやワークショップで評価してもらっています。文書で渡して、4段階で丸をつけてくださいというような学校評価ではなく、年度最後の3月に話し合って、子どもの姿を描いてもらいながら評価していただいて、次年度の運営にあたらせていただくというようにしています。

また、誰でも分かる枠組みを易しい言葉で明確にしています。何をするかということもそうですが、部会名も長々としたものではなくて、福祉なら「福祉」ということで表すようにしています。

次に、御所南コミュニティのメンバーですが、毎年ほぼ決まっているのは、9人の自治連合会長さんです。この方々には入ってもらわないと動かないのでその9人と、それから地域の代表の方を輪番で9年に1度の順番で回られています。それからPTAの役員さんです。本部役員は11名おるんですが、11名の方をそれぞれ10部会に配置しています。それから必ず公募をします。もちろん地域の方が多んですけど、やはり地域と保護者の方だけではなくて、色んな認識のある方や発想のある方を入れていかないといいけません。御所南コミュニティで活躍をしていこうと思われる方に公募を通して入っていただいています。それから、総合的な学習で御所南教育に携わっていただいた方にも公募で入っていただいて、御所南教育をこの中で語ってもらうというようなこともしています。あと、年度ごとにメンバーとして決まるのは、各ボランティア団体から選ばれた人です。また、PTA専門部からも必ず部会に2名ずつ参加いただきます。こういう取り組みが決まったとなると、その2名の方が何月何日にこれくらいのボランティアが要するというのを、この専門部会のPTA教養文化部の方に連絡するわけです。そういう方たち

が揃いまして、御所南コミュニティという組織の委員さんとして位置づいているわけです。

次に、「学校運営協議会」の組織図です。御所南コミュニティの理事会を学校運営協議会としています。平成14年から16年までは理事会と呼んでいたんですが、法制度ができて、学校運営協議会と呼ぶことになっています。本校では各部会の部長さんが学校運営協議会の委員になっています。というのは、部会を進めることが中心になっていて、その部会運営を学校の中で調整していかないといけないので、各部長が委員になってもらっています。その他の実働隊のメンバーは、京都の運営規則の中に位置づけられているんですが、企画推進委員と呼んでいます。10部会にそれぞれ入っているメンバーさんは企画推進委員。それからPTAとの絡みがあるので、PTA会長さんも学校運営協議会の委員になってもらっています。この学校運営協議会は14名で構成されていますが、学校教育目標や経営方針、いわゆる教育課程編制に対する承認をここの学校運営協議会では経ていまして、企画推進は活動を考えることが中心になります。そういうような学校運営協議会のメンバーにさせてもらっています。

また、京都では、学校運営協議会を持っている学校へ教員公募ができます。「その学校に行きます！」と手を挙げるができるわけです。そのときに、教員公募をしてきた教員の面接をします。おこがましいですが、その教員がこの学校で活躍してくれるかどうか、ふさわしいかどうかを面接して決めて、そして教育委員会に、「この教員を異動してください」という打診をするわけです。その面接には、この学校運営協議会の委員さん、地域の方であつたり保護者の方々も同席します。面接をすることで学校側の意識、帰属意識が非常に高まります。活躍されなかったからといって学校運営協議会の方に責任があるわけではないですが、やっぱり選んだ責任みたいなものは学校側と共にあって、これをするによって教員を大事にしてもらえるようになったなと思います。学校側の発想で考えられるように少なくなってきたかなと思っています。非常勤講師の方は、もう少しシビアで、だいたい教員公募で来られた方というのは意欲を持って学校に来られるので、まあOKですという形ですが、非常勤講師というのは採用を決定することになりますので、6名のところを例えば12名とか応募してくるので落とさなければならぬんですね。それを面接の中でやっていきます。それも学校側からでは聞きにくいようなことも地域の方が聞かれたりしてですね。非常に学校側の立場に立って考えてくれます。一番言われるのは、面接のときに、応募された方が「御所南小学校で自分も学ばせてほしいです」というようなことを言わはるんですけど、そういう言葉を聞くと地域の会長さんたちは、「自分が学んでる場合じゃない。自分の子どもたちのためにやります！って言ってくれないと困ります」というふうに、ズバツと言わはります。自分たちの子どもたちのために何をしてくれるんだ、というはっきりとした意思があつて、そういうことは我々はとても聞けないんですが、そういうことを言わはったり、本当に自分たちとほぼ一致するんですけども、よく人となりを見ていただいています。こういうことを毎年させていただいているんですが、そうすることによってやはり学校と地域が、教職員も含めて、自分たちの先生であるという意識があります。それはやはり大きいことかなと思っています。

レジュメの2ページ目になるんですが、こういう方たちで学校運営をしていきます。御所南コミュニティの委員は90名、教職員が大体50名で、授業や行事の企画と実施、保護者のボランティアもここに参加して、世代を越えた集まりと思っていただいているんです。大変狭い部屋に、教職員も含めて140名一同に集まって、非常に一体感があるんですけど、会議を全6回行っています。5月に第1回をスタートします。4月はやはり教職員の異動や各種団体さんの役職の交代とかあるので、5月に実施して、5、6、7月と1ヶ月に1回続けてやります。ここはやはりスタートでもあるし、年間の行事の打ち合わせ

もあって3回続けて行って、あとは10月、1月、3月とちょっと間をおいて全部で6回行っています。先ほどの学校運営協議会は、6回ではなくて、それにプラス3回多く、年に9回です。学校運営協議会は必ず御所南コミュニティの1時間前に行って、今日の部会の進め方とか、こんなことを話し合っておいてほしいということもちゃんと調整した上で、その後御所南コミュニティの会議を持つようにしています。

御所南コミュニティはだいたい2時間厳守で行っています。これは今後も課題なんですけど、やはり各地域の方、保護者の方もお勤めをしている方が多いので、どうしても19時からのスタートになります。学校運営協議会は18時からのスタートになっています。ですので、課題は教職員の勤務時間ということになるんですが、この辺は地域の方、保護者の方も会議にはボランティアとして入っていただいているので、地域貢献という意味でボランティアで教職員にも参加をしてもらっています。どうしても用事があったりとか、事情があったりとか、小さいお子さんを持っている教職員は、その部会には位置づけてはいるんですが、この夜の会議には携わってもらっていない、という事情を踏まえた上で進めてもらっています。

こういう事業や授業の企画の話し合いは、だいたい夜が多いんですね。一部、会議には管理職と教務主任だけ出ているという学校もありますが、京都市はほとんどが教員レベルは必ず出るというふうにしています。地域と学校が一体的になるという意味ではそういう学校が多いです。ちなみに京都は、176校のうちの139校がこういう組織を持っています。部会数はだいたい6部会くらいです。本校は、やはり統合校ということもあって、それから役職の方がたくさんおられるので、12部会からスタートして今は10部会になっていますけど、平均は5ないし6の部会を持って進められている学校が多いです。

ここで世代を越えた人と人とのネットワーク作りが広がるというふうに見えています。保護者同士、学年を越えた交流、地域住民同士の交流がここで生まれます。それから世代を超えた異世代の交流もここで生まれることになります。こういう会議の場だけではなくて、先ほども言ったように、ボランティア活動の中でも、こういう交流が生まれていくわけです。一番良かった点というのは、9学区の自治連合会長さんというのはそれぞれで自治をされていて、入学式や卒業式には来てもらっていたんですが、この御所南コミュニティができる前までは、あまり話をされたことがなかったようです。隣同士でありながらも。でもこれら取り組みで顔を合わせるようになって顔見知りになって、後から分かったことですが、21時に会議が終わったら、その後の会があったみたいでそれぞれ懇親を深められて、自分たちの自治の悩みを話されることができるようになったようです。元から住まわれている方とマンションに住まわれている方の地域自治をどのようにしていくか、マンションの方をどのようにして地域自治に参加していただくか、そのようなことをそれまでは相談できなかったようですけど、そこが相談できるようになって、非常に仲良くなられたようです。学校側としては、その9人の方を突出してもらわないように、必ず同じ立場で、伝えることは伝え、何か特別に相談するというようなことがないように、フラットな付き合いをすることを心がけています。だから、何か大きなことをこの9学区に伝えるときには、必ず9人の方に集まってもらって、そこで同時に伝えます。伝わる時間差ができてしまうと後でやはりなぜそうなったのか、ということになってしまうので、注意しながら大事に進めています。

それから、異世代の交流ということでは、マンションに住む方が、子どものためだったらということでもボランティアで出てきている。ミニミニ運動会のボランティアに出てこられる。色んなところに出てくれたときに、どこの方が分からなかった方が地域の方と顔を会わされて、そのマンションとい

うことが分かって、自分たちの学区の人だというのが分かって、地域自治に少し勧誘をしていきながら顔見知りになって、交流が深まっていくというようなことも何回かあったと聞いています。だから、地域の自治にもそういう保護者の方がつながっていくような、パイプ役というかジョイント役を果たしているのかなと感じています。それから、これも保護者から始めているんですけども、やっぱり地域の方は、子どもを持つ親は何をしているんだ、という意識があります。なぜ自分たちが先に動かなければならないのか、ということをごっかくで思っています。ですので、本校では親が先に動く。組織を作っても何かしようとしても保護者がまずやって、ちょっと足りないところ、応援してほしいところを地域にお願いするというのをコンセプトにしています。そうすると、地域の方が保護者は何をしているんだ、地域に頼りすぎじゃないかという意識がなくなっていく。保護者も色々しているし、大変だから一緒にやりましょうという意識が生まれる。もちろん、その前に学校が動くというのがあるんですが、学校・保護者が動いた上で地域の方に動いてもらうというのをベースにして動くようにしています。保護者が、年に1度は、「コミュニティの中でボランティアしてください」というように呼びかけていますし、PTA専門部やクラス委員さんというのは毎年代わられますから、毎年クラス委員さんがこういう形で関わっていくと、地域の方と一緒に活動する機会が必ずありますので、ボランティアと組織が位置づくというのはとても大事なことで実感しています。

沖縄でもされているかと思いますが、子どもの安全を見守るということで「見守り隊」と呼ばれているんですが、本校は統合によって非常に地域が広いので、「お帰り当番」をやっています。子どもたちは登校よりも下校の方がばらばらと帰っていくので、安全面として50箇所に30分間、14時から16時の間に立ってもらっています。1週間に1度お願いをしているんですが、保護者が平成17年から始めて、平成18年には地域の方にお頼みして、今はもう7年目を迎えていますけれども、このようにして活動へと発展して続けてもらっています。

成果といえるかは分かりませんが、10年目を迎えて、もう一度モットーとして、「この御所南コミュニティの取り組みを通して、将来のよき町衆を育てましょう」ということを言っています。町衆というのは、人のために何か尽くしていく人たちである、ということで、最終的には今の自分たちの地域じゃないかもしれないけど、自分たちが住む地域に貢献していく子どもに、大人に育ってほしいという願いがあります。そういう町衆を育てていきましょう、と。これを合言葉に、地域住民の参画、学校の事業実践を大事にしながら、地域に学校に、愛着と誇りを持つ子どもを育てましょう、と。それから、子どもたちは地域の方に見守られているという意識が育っています。やはり、御所南コミュニティをして何が変わったかということと子どもの意識、子どもの様子が変わりました。本当に積極的に安心して学べる子どもたちが増えてきたし、挨拶もできるようになってきているし、意欲的な子どもが増えてきたなど。積極的に人と関わって話していく子どもが非常に増えたのと、やっぱり地域の意識も成果としては変わったなと思います。

それから、これは学力向上の基盤となる意識ですね。帰属意識という。学校をベースとして、という意味では、これは学力向上の安心と言う意味もあるんですけども、やはり地域が安定して安心して住める街であつたりだとか、地域が子どものために動いてくれはるという意識が家庭や子どもにあるということ、また何事においても安心して活動ができるというのは、じっくり学べるという意識や落ち着いてできるという状態が生まれます。これは確実に、学力向上につながっていると我々は捉えています。教職員も土曜日に各部会での集まりがあると確実に出てきます。これは決して、土曜日のその日に出て

きていることが何かを変えているというよりは、こういう取り組みをすることで、子どもが安心して学校で学べる、授業の中で落ち着いてできるということにつながっている。それを教職員も実感すると、しんどい思いではなくて、土曜日の活動でも出てきてくれる意思が生まれてくるわけです。教員が、直に地域の方の話を生で聞き、実感があるからこそ生まれることだと思うし、地域の方が子どものことを考えてくれるんだったら、自分もプロとして子どもに何ができるのかということを実際に考える。プロ意識をくすぶることにもつながっているなと思っています。

そして、何よりも目指しているのは「学校が大好きな子ども」です。子どもには毎年年に2回アンケートを必ずとるんですが、「学校が大好きと思っていますか？」という質問です。これを100%にしたいんですけども、80%代です。生徒は1000人越えていますので、好きでないに印をつけるという子とは150人以上いるわけです。やはりこれは私たちは安心していないで、その150人の子どもを何とかしないといけないと思っています。

これとイコールしている数字が、自尊感情なんですね。「自分を好きだと思っていますか？」と聞くと、これも同じくらいなんですよ。15%くらいの子どもの自分のことを駄目だと思っているんですよ。学校大好きという子どもと自分が好きでないと思う子どもと、この辺は関係しているんじゃないかなと思っています。だから、やはり自分に自信を持つ子ども、これも同時進行かなと思っています。自尊感情を高める取り組みというの、この御所南コミュニティには大きく貢献しているんじゃないかなと思っています。みんなの前で「すごいね!」「よくできたね!」と地域の方に言ってもらえたりということが、子どもが自信を持ったり、認めてもらったと思える。保護者だけ先生だけじゃなくって、色んな方に認めてもらえるという場がある。これがとっても大事なことじゃないかなと思っています。

それで、御所南コミュニティ10周年ということで10年を迎えて今もう一度立ち戻っているのが、やはりしんどい組織では駄目だなということです。やはりたくさんの方で役割を分担して、みんなができる委員である。ある人にだけ負担がかかるような組織では、やはり駄目だなと思っています。部長さんがしんどい役割をすることが多いです。学校運営協議会にも出てきてもらわないといけないし。そういうイメージがあるんですけども、だいたい地域の自治連合会長さんの地域コミュニティの部長さん以外は保護者の方にやってもらっているんですが、だいたい1年か2年で次の部長さんに交替してもらうようにしています。たくさんの方に部長を経験してもらって、大変さを分かって、委員として何ができるか、補佐する役割をもってもらいたいということで、今、部長さんの下に副部長さんを置いて、副部長さんが1年後に部長さんになっていくという形にして、みんなで役割を分担しています。

それから、組織を変えて、新たなメンバーでこういうのが何年かに一度あるんだというふうに思っています。

それから、取り組みの情報を様々に発信していくことが、大事になってきます。やはり10年目ですけども、保護者の中には「御所南コミュニティって誰がやっているんですか？」と聞かれる方もまだまだおられるんですね。958家庭ありますから、やっぱりまだまだ浸透していないんだな、と。人ごとになっている保護者の方々もおられるので、機会を得ることにしています。

組織を変えて新しくすることでとても良かったことは、学校の課題を御所南コミュニティの方や地域の方みなさんで共有できていること。私が去年校長になって、「子どもの体力と精神力が弱くなっています」とはっきり学校説明会のときに言いました。「17年間、御所南に開校からいるので、担任からずっと子どもたちの変遷を見ていると精神的に弱い。ちょっとしたことで学校を休む。ちょっとしたことなん

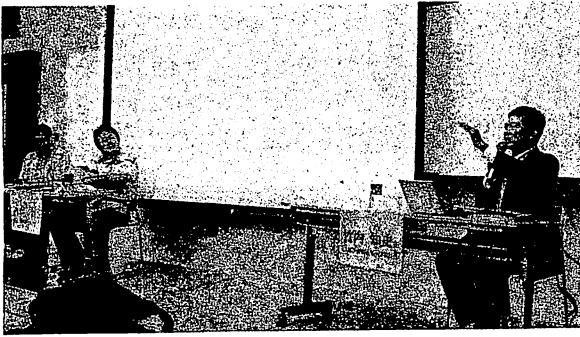
です。宿題がちょっとできにくかったとか、教科書がないので恥ずかしくていけないとか。なんかちょっとしたつまずきで立ち向かえない。こんなことで学校に来れないというようなことは昔はなかったなと思う実態があるし、保護者も子どもに気を使っていて押せない、無理押ししないという傾向があるので、これを何とかしたいです」と。

今年はそれを1年間考えて、宿泊活動と登山活動を入れました。共通でしんどい体験をして、お互いが協力して励まし合うことで達成感がすぐに得られるという活動を入れたかったのです。3年生と4年生と5年生は、ちょっとずつ山の高さの違うところを登ります。最終6年生は、長期宿泊学習4泊5日で1500m級の山に登るようにしています。そこを目指して180人、今200人くらいいるんですが、どれだけ登れるのか。「できたら全員行かせたいんですが、それに向かってちょっとずつやっていくことをしようと思います。まず一つの取り組みです」と言ったら、野外活動・スポーツ部会の人、「じゃあその活動の前に練習会を開いてあげます」ということを言っていたいて、山に登る5月に、それよりちょっと低い大文字山に苦手な子を集めて30人くらい登らせてもらったり。昨日は30人くらいの子を集めて比叡山に行ったんですが、ミニ演習みたいなのをしてもらったりとか。そういうふうにこちらが課題と思われることを言うと、一緒に考えて「じゃあこんなことしましょう!」と言ってもらえるというのが、とってもありがたいなと思っています。

今までだったら、多分学校側も「こんなことが大切だからこんなことせえや!」と言われるんだろうなと思って、言わなかったんですね。あんまりそういう課題を発信するということはしてこなかったと思うんですが、正直に今子どもの状態はこうだ!と。それで、今学校はこんなふうに取り組んでいるし、これからこんなふうにしていこうと思うと発信すると、応援団というか、地域もこうしていこうって言ってもらえる。そういうような関係が学校側としてはできてきているし、それを共に考えることで、子どもたちが今度は同じ様な気持ちで地域行事に参加してくれるようになるんですね。そうすると、子どもが地域に帰ってきてくれることは、町も活性化するしにぎやかになると喜んでもらえている。それぞれの地域の実態によって違うと思うんですが、こういうような双方向をつくることができる。学校がジョイント役となって、つなげるパイプ役の役割を果たすこともあるだろうし、必ずや学校というのは子どもを核にして地域・学校・保護者がつながっていく場所だな、と思います。それをお互いが上手に使って活かしていけばいいだろうし。何も新しいことを作っていかなくて、すでにある組織をちょっとこう変えて、みんなが入ってもらえる組織として、学校運営協議会なり御所南コミュニティなりを組織するとか、それぞれの役割をそこにちょっと位置づける。御所南コミュニティは10部会ありますが、1部会でも全然構わないと思います。できるところから少しずつ組織を編成していきながら、それで十分コミュニティ・スクールになっていくのかな、というふうに思っています。

長く喋ってしまいましたが、何か本校の取り組みの中でヒントになるようなことがあればなと思います。聞いていただいてありがとうございました。

第二部 論点整理と質疑応答



コーディネーター／前城 充氏

(沖縄自治研究会メンバー、南風原町立翔南小学校 PTA)

コメンテーター／島袋 純氏

(琉球大学 IIOS「人の移動」プロジェクト現代沖縄研究班代表)

講師／竹内 知史氏 (京都市立御所南小学校校長)

(敬省略)

前 城：御所南小学校と翔南小学校との関わりは、今年の1月の末、我々翔南小学校 PTA が視察をしたことから始まります。翔南小学校の PTA 会長と兄貴校であります南星中学校の PTA 会長、そして教務主任と私の4名でお伺いしました。なぜそこにつながったかという、翔南小学校もコミュニティ・スクールのような地域運営を目指しているからでありました。その時に、私たちがネットで発見したのが、御所南の「よき町衆を作る」ということです。今日もお話いただいた中に、その言葉があります。モットーというところです。そこには、「よき町衆を作ることと子どもたちの規範意識を醸成する」ということがありました。この二つのテーマが御所南の学校と地域で共有されているというが分かりましたので、よしこれは調べてこよう。学校も「学力向上」とか小さい範囲ではなくて、地域づくりという関係で学校の外から調べてきました。そういう気付きが多くありましたので、今回は是非多くの方に竹内校長の話を聞いてもらいたいと思いまして招聘しました。

これから島袋純先生から何点か質問があります。その後、会場の方からも質問などご意見いただきたいと思います。

島 袋：はい、私のほうから質問させていただきたいと思います。このフォーラムは『人の移動・定住と「公」の役割』という研究として行われています。その中で学校がもたらす役割というのを今回は考えてみたいと思います。

今の話を聞いて、一番重要なポイントは何かと言いますと、これは先生方が学ぶ場、学び合いの場を作り直している。先生方と地域の方々が一緒になって学び合う場を作っている。そして、両方の方々の学び合う場が作られていく。何を学び合っているのかというと、よき町衆にとって必要な、地域的な課題を発見し、共有し、独りよがりにならず、多面的、多様な視座から意見を出し合い合意形成をしていくことです。そういった力は必要で、これは放っておいてもつくわけがない。恐らく閉じた学校、閉じた学級ではつきません。御所南小学校では、市民が自分たちで学び合い、話し合っていました。しかも自分たちで学んだ内容を子どもたちに教えるというシステムになっていたのではないかと思います。そして非常に重要な点なんですが、よき町衆の能力として、「読解力」というものを柱にしていました。もう1つ、プログラムを見ると「探求力」というのを非常に重視している。総合学習を中心として、9年間の学びのプロセスの中で、どういった子どもをどう伸ばしていくのか、非常に明白に作られている。それがバラバラにならずに、求心力を持って子どもたちに教え、そして一定の方向に学びの足並みが揃うという形になっているんじゃないかなと私は思いました。

そこで第1点目にお聞きしたいのが、この読解力についてです。PISA 型の読解力というのは最近流行っているんですが、これは探求力と非常に似たような概念で、さまざまな状況に対するデータの情報、言語的な情報をどう自分なりに解釈して課題を設定して解決を目指していくか、ということですよね。だから「課題探求力」と言い換えてもいいんじゃないかなと思うんですが、そういう力を意識化されて、さらに、ここでいえば年間のスケジュールと総合的な学習の時間の開発を、先生方は単独でやったのではなくて、地域の方々と一緒になって作っていったんじゃないかと想定しているんですが、これがどうやって出来上がったのでしょうか？

2点目は、実際に市民の方々がどのようにしてこのようなことを意識化されていったのでしょうか？もしかしたら最初から意識化されていたかもしれませんが、あるいは結果的に、こうした場を通して「市民」になっていったのか。要するにちゃんと課題が発見できて議論し、合意形成ができなければ、会議は紛糾して大変なことになると思います。だから市民が「市民」の学びのプロセスをちゃんと準拠してきて育ってきたと思います。そういった市民が、どのようにしてこういった「市民」になっていったのか。特に補足説明していただきたいのは、新しく住民になられた方々が、その市民のシチズンシップを取得して、本当によき町衆となっていくために、こういったプログラム、それからシステムがどのようにして機能していくのか。昨年度の私たちの調査では、沖縄はこういった新規住民が沖縄地域社会には上手く取り込まれていないということが分かりましたので、その部分について教えていただければと思います。

3点目は、教員養成プログラムの中に、地域の方々と水平的な関係を持って、一緒になって課題を発見して、一緒になって学び合って、一緒になって授業を作っていこうというプログラムがありません。一切ないと言っても過言ではない。その後の教員研修の中にそのようなプログラムあるのかどうか分かりませんが、先生方が市民となっていく、そういった学びのプロセスを作る場というのは難しいというのがあります。それをどう構築して、先生方がこの学び合いの場に住民の方々と参加するようになったのか。エポックメイキング的な事件やあるいは竹内先生のほうからそういったきっかけが何かあったのか、教えていただければと思います。以上です。

竹 内：まず1つ、子どもの PISA 型読解力の育成ということを言っていたいて、そのように捉えていただいていると思うんですけども。まず、やはり子どもが一人ひとり力をつけ、学ぶ力をしっかりつけるというのは、学校教育が目指しているところの知徳体なんですけれども。特にその部分というのは、地域の方からしてみれば専門性なんですね、学校の。そこは、教科授業も含めて、先生がすべきところであるという認識はあります。それに対しては、専門的でもあるし、なかなか意見が言えないということもあって、「任せます」というのが多いです。そこが学校としてきちっと示しているかどうか、自然な線が引かれるかどうか、これは大事なところだと思っているわけです。学校がしっかり学べる状態であり、しっかり子どもが育っているという実感が地域にあると、そこには絶対に越えてはこれられません。保護者であっても。そこで力をちゃんとつけるような取り組みを学校がしているかどうかという、ここが大きいところだと思っています。だから御所南小学校は2つ前の校長からの希望なんで

すが、学校が何をしているかというのは問われていくので、とにかく子どもに力が返るようにしていこうと。そういうことで研究は続けていますけれども、研究が研究で終わるようであってはならない。ずっと言い続けているのはそういうことです。

それと、最近でいいますと、やっぱり子どもが将来、自分の未来を切り拓いていく力として PISA 型の読解力が必要である、と。身につけていくべきである、と。一人ひとりが身につけていくために、一斉学習からの脱却というのをこの6年で開発しました。今は子ども主体の授業をやっているところです。子ども主体の授業のあり方というのは、子どもが45分間の授業にいろんな言語活動を行うということがまず一つ大きいです。教授型になりますと、子どもは45分の中で「聞く」しかやってないんですね。あと、ちょっと「書く」。それだけでは子どもに力がつかないので、まずどの教科も、ベースは課題をみんなで共有して考える。そして時間を自分たちで決めます。1年生はまだ自分たちで決められないんですけど、3年生くらいになると45分間の割り振りを自分たちで決めます。まず課題に対して自分がどう考えるかを持ちます。それが「一人学び」という時間ですが、そこにテキストが資料としてあるんですけども、そこで必ず子どもが情報収集をします。そしてまず自分の考えを書きます。低学年は2人、隣同士ペアで。高学年になると4人グループで自分の考えを話し合います。これはただ単に自分の考えを話すだけではなく、きちっと理由も根拠も提示した上で話すように指導します。「こうこうこうだと思います。なぜならば、ここに書かれているところから引用しました」というふうにです。それをディスカッションして、討議か議論かをはっきりさせて、グループで作るのか深めるのか、一つの答えにするのかしないのかもはっきりさせて、あと学級全体で話し合って、最後、自分の振り返りをするというスタイルを確立させたんですね。それを司るのが、子どもたちです。子どもが授業の司会進行をしていくんです。教員はそれに対して支援をしていく。高学年になると、子どもが板書をしていきます。そういうふうに自分たちの授業であるというところの意識があって、1時間に子どもの言語活動を様々にして、必ず書く・聞く・話す、というのを位置づけて子どもの力を付けさせています。それを子どもたちがコミュニティの色々な場で発揮すると地域に見えます。何か話し合って感想を言うときとか、地域の方々は聞いていらっしゃるから、そういうときに見えていく。それも理由をはっきりさせて述べていくということがすごく大事になっていく。それを総合的な学習でも、コミュニティ・ティーチャーと一緒に作っていくんですね。そうすると、コミュニティ・ティーチャーに來た人が自分の伝統工芸や伝統文化に対して見つめ直せるというふうに言ってもらえるんです。子どもの発想でハッとすることがあるとか、子どもの意見でおッ！ということがあるとかですね。自分に活かせられる、そういうことで町衆へとなるんだと思うんですけども。コミュニティ・ティーチャーたちは、単にお手伝いしてはるんじゃないくて、子どもの意見も受け止めて、自分もまた学ぼうとしてはるんですね。それを子どもたちは実感する。いつまでも学び続けていくということ、これが町衆なんじゃないかなと思います。それが、人のためにどうするかというのを考えられる人である、と。高学年では、まさしく自分たちに教えに來てはるんだ、ということが思えて、ありがたさにつながるんです。課題も自分たちで作っていくので、最終的にはスパイラルで、いつまでも自分の課題というのを追求していけるような子どもになっていけたら、というのがあります。

総合的な学習というのは教科だけの学習ではなくて、そこで自分の持ってきたことが出せているというのが大事な学習なんだな、と思っています。

それを教員として汲んでいくときに、3つ目の質問になってしまいますけど、やはりコミュニティ・ティーチャーや地域の人々と話をしていく、段取りをつける。地域の方じゃないと総合的な学習はできないので。そうすると必ずアポをとって探し出し、コーディネートしていかないといけないと思います。教員の資質として必要だと思うんですよ。学校の授業も教科書だけでは得られない、それだけですまないようになってきている。学校の課題も教員だけで解決できるなんていうおこがましいことを思っていたら成り立たないと思っているので、手助けではなく「一緒にやりましょう」というコンセプトを教員が持つておかなければあかんと思います。言われているように、教員養成でどういうふうにしていくかというのは、文献だけでなくコミュニケーションの仕方だったりを身につける必要がある。最近、色んなところで学生ボランティアが熱心に関わっていて、すごくいいと思います。社会性ができてきます。

また、2つ目の質問について。マンションが増えて、新しく他府県からいらした方もたくさんおられるんですが、新しい市民の方には、まずボランティアに出てきてもらうということがやっぱり大きなことじゃないかなと思います。そういう機会を積極的に投げかけて、子どものためにボランティアとしてできる範囲内でやってほしい。そして学校のことを分かってもらう、地域コミュニティのことを分かってもらう。そういうことを意識的にしているので、ボランティアの申し込みや機会っていうのは結構たくさん位置づけています。まずは出てきてもらわないと何もないので、そういう形で出てきてもらって、関わってもらう。ボランティア精神の浸透かなと、そういうふうに思います。

前 城：7月30日に岡輝中学校の森谷先生のお話をお聞きました。その際に、岡輝中学校と御所南小学校の共通するところがありました。何かというと、森谷先生も「教員は授業が勝負だ」と言っていたんですね。岡輝中学校も学び合いの姿がすごいそうです。私も、御所南を訪問したときに、子どもたちが授業しているのを目の当たりにして驚きました。そして偶然にも、その日の夜に第5回御所南コミュニティの集まりの様子が見れました。100名近くの方がいたんですが、それを見てもう1つ岡輝中学校と同じところがありました。それは、人と人とのつながりが大事だということです。これは何が大事かというと、人とつながっているネットワークが多いほど、地域が安全・安心であるということです。安全・安心な地域がなぜ大事かというと、授業に専念できる教師の環境を整えることができるんですよ。このあたりが、やっぱり共通しているなと感じました。

みなさんのほうから、どなたか挙手でお願いします。

質問者A：市役所に勤務します。岡輝中学校の授業でも「協同学習」というのがありましたが、御所南小学校のほうでも生徒が仕切ってやっているというのは新たな発見でした。私も仕事で市民大学をやっていて、それととても似ているなと思いました。話をしながら気付きを得ていく、そういうワークショップをやっているんですけども、それがとっても有効なんだなというのが確認できました。

質問は、役所はこのような取り組みに対してどのように関わっているのか、ということが

聞きたいです。

質問者B：小学校に勤務する者です。先ほど、お話の中に読解力に関する取り組みがありました。私自身も読解力に非常に興味があるんですが、御所南小学校では読解科とともに読解メソッドという新しい領域を設定して学習されているというのがあるんですけども。同じような取り組みが沼津市とか広島市にもありますが、そこでは副読本を準備されていました。御所南小学校でも副読本が用意されているか、ということと、具体的にどういうことを授業でやられているのかということが聞きたいです。

質問者C：教育委員会の者です。衝撃を受ける話ばかりで、まさにキャリア教育だなと思って聞いていました。僕らが学んでいることというのは、何のために学ぶのか、何のために仕事をするのか。子どもにとって最大の疑問が目の前にあって、教育委員会で導入するにあたって学校にとってメリットがあるんだよ、ということと言わないと、我々はなかなか。

学力調査が始まったときにマスコミが独自の調査をして、御所南小学校が学力日本一ではないかと取り上げていることがありました。いくつか本を読んでみると、総合的な学習が影響を与えているんじゃないかということがありましたが、色んな相互作用で学力が上がってきたと思うんですが、元々高い学力が、総合的な学習とかコミュニティが進んできて上がっていったのか、それとも授業改善をしてやっぱり上がっていったのか。一番大きな要因はどのようなものだと考えていますか？

もう1点。沖縄市学校支援本部事業ということで同じような感じで授業をしているんですが、実はコミュニティ・スクールに興味を持っていて進めていきたいと考えています。学校支援本部事業でも地域を巻き込んでやっていますが、やっぱり沖縄は現役世代は共働きが多くて、なかなか参加できない。リタイアした世代を上手く巻き込んでやっているところは成功していると感じたんですが、同じような印象を受けたんですが、この学校支援地域事業とコミュニティ・スクールの一番大きな違い、それとメリットがありましたら、お伺いしたいと思います。

前 城：最初は、担当の教育委員会がどのように関わっているのかということでしたね。お二人目は、読解メソッドというところとどういった形でやるか、副読本はあるか、ということ。最後の方は、学力が上がった要因は何があったのかということと、学校支援本部とコミュニティ・スクールの大きな違いは何かということですね。では先生お願いします。

竹 内：はい。教育委員会との関わりですけども、それは指定を受けたとき、平成14年から、学校の裁量権の拡大ということで、学校指導課というところとタイアップして、教員公募など、学校に決断を任せていく部分をたくさん与えてもらいました。それとともにコミュニティ・スクールですね。地域と連携・協働している限り、教育委員会がずっと決めていくということではなくて、学校をベースに大事にしてもらったというのが大きいです。今は生涯学習部というところがそういう活動を支えていて、予算もなかなか、ボランティアなんですけれども。今、土曜学習という取り組みを全市的に行なっていますが、最初は学習面だけの取り組みとして位置づけられていたのが、本校のように体験的な学習を、御所南コミュニティの事業として位置づけられているものに関しては申し込めない状態だったんですが、その辺を少し要求しまして、これもまた学びであるし、土曜日の午前中にこういうような体験をする

ことは、教科の学習だけではなくて、子どもの学びにつながっているということを言いまして、土曜学習に、「学習に関すること」と「体験に関すること」という2つの計画書ができ、そして予算をもらえるようになりました。その意味でそこで賄えるくらいの授業ができていたので、今は生涯学習部との連携では、中身的にはほとんど各学校で進めてきています。それについての援助や支援や相談は、ほとんど学校サイドに任されていますので、報告だけで「こういうことをします」ということだけになっています。

それから、読解科なんですが、時間としては年間の標準時数というのがあるんですが、高学年の4年生から6年生までは週に28時間だと思います。それを1時間プラスして29時間授業をしています。そのプラス1時間した年間というと35時間を、読解科の時間として中学校も同じように小中一貫教育の中で読解科として取り組んでいます。そこで狙っているメソッドは、読解力を高めるための方法を会得するということです。テキストは、最初の平成17年はフィンランドの国語教育の翻訳本を基にしていました。ですが、フィンランドの国語教科書の中身とフィンランドの文化を理解できないと、そのお話が理解できないことが分かってきたので、これだけでは読解科としては難しいなということで独自のテキストを作りました。また、その教科書にもテーマ学習として学年に1つか2つはフィンランドの国語教科書を使っているんですが、その他はいわゆるほとんどテキストの働きや種類をメタ認知する。例えば、観察報告文というのは、こういう様式であって、こんな特色がある、ということのを会得するんですが、観察記録文としてしまうと、これは理科や国語科でもやっているの、それは各教科でやりましょう。なので、色んな教科にまたがるものをテキストとしています。そこはなかなか難しいところがあって、テキストを選ぶのは非常に困難なんですが、うまく整理しながらやっています。例えば、パンフレットというもので表現するとき、パンフレットの特色はどんなものですか、というようなことはどの教科もやってないんですね。でも、パンフレットというのは生活科の中でも書くし、他の何かに表すようなこともします。それを読解科の中でいろんなパンフレットを持ってきて、その特色を捉えたりとか、共通項を捉えたりするような形で、パンフレットというのがこんな型があるんだというのを、会得する、あるいは認識するまでが読解科の時間です。それを実践するのは各教科です。それをつないでいるんですね。パンフレットをメインにしてやるんですが、パンフレットを勉強した後に、生活科で町探検をしたら、自分たちの町のパンフレット作りをする、というようにしてつないでいます。あと、1年生では看板について。看板も街のテキストなんですね。ノートではじっとできないので街へ行って看板を見て、看板の特色を教師が言って写真撮って、それを並べて比べて分類します。字とか色とか大きさとか、それで比較分類などテキストの働きを得ながら思考の仕方を学ばせているというのも読解科です。もう1つはテキストの働きを学びながら、読解の学習のプロセスというのも学んでいく。例えば、「より良い学習計画って何？」という単元があるんですが、いろんな学習計画の立て方を学習したり、「なるほど課題作り」と言って、どんな課題がより良い課題かとか。そんなものもテキストを基に会得すると、読解のプロセスがより良いものになります。学習計画を各教科で立てるときもそれが生きて、計画がより良いものになったり課題作りもしっかりとしたものになったりする。読解科でやって、そのテキストの働きや種類をメタ認知しながら、読解のプロセスと

思考を上手くそこに絡めて両方会得するように展開するというのが読解科です。なかなか分かってもらいにくいかもしれませんが、それを読解科としています。単元は3時間か4時間です。実際に書くということをせず認識して終わるので、大体そのくらいで終わるので、そういう単元を独自に各学年で作って、毎年ファイルにして、略案とワークシートとを次年度に送って役立てています。それが読解科です。

それから学力についてですが、非常に難しい質問で、これで、ということはなかなか難しいかもしれませんが、ずっと考えてみますと、平成9年から総合的な学習の時間を早めに取り入れてやりましたが、実は総合的な学習だけを取り組んできたわけではないんです。総合的な学習をやりながら、2年目になってこれは教科学習がやっぱり大事な、ということが分かったんですね。というのは、インタビューに行ってもまともに聞き出せないし、話を聞いてもメモをとってまとめられないし、お手紙書いてもちゃんと書けないような状況がありました。今でこそ教科の知識と技能を活用してと言われていますが、しっかりした総合的な学習をするためには、教科学習を、授業をしっかりして、そして力をつけ総合的な学習の両輪でいかなければならないということを打ち出しました。総合的な学習が前に出ますが、結構、教科学習にも力を入れて両方でやっていたことが、やっぱり子どもの学力を伸ばしたと思います。総合的な学習だけやっても、いわゆる体験だけで終わってるのとかやうの、楽しいだけで終わってるのとかやうの、と。そう言われるのは、そういうところにあると思います。体験をしたことを必ず書かせて、客観的にもものを見させて、ディスカッションして、ということをしていったら、話し合う力とか書く力とか、色んなことが要るということが分かったので、それを徹底してやって、その延長戦上に PISA 型読解力というのが重要になった。フィンランドの読解力が1位だということから、2つ前の校長が持ってきて、もっとしっかりと学力をつけるには、これだ！ということで取り組み、全国学力テストが始まってこれで証明されたという形なので、総合的な学習からつながったところで、学力がついているというのがあると思います。ただ、先ほど言われた通り、コミュニティ・スクールをやったお陰で落ち着いたし、やっぱり教員がその研究に邁進できます。生徒指導上の問題はあまりないです。保護者も協力的だし、ボランティアも呼びかけて、やっぱり必死に協力してくれはるという、そういう地盤があるからこそ教員がそこに向けるし、上手なサイクルが回っているので、その地域が安全・安心というのもこの学力を支える大きな基盤で、大事なところだと思っています。

コミュニティ・スクールはやっぱり学校の運営面に参画するというのが学校支援本部事業との違いだと思います。一緒に学校を作っていくところがあると思うんですね。授業をしているタイプは学校支援本部も一緒だと思うんです。学校支援本部というのは、活動に対する支援なので、活動自体は同じように見えるかもしれません。学校支援本部事業だけだったら活動は活発だと思いますが、学校を共に作っていく、その参画意識といいますか、運営意識というのは、少し弱い面があるかなと思います。そこに違いがあるんじゃないかなと思います。

前 城：参考までに、沖縄市はコーディネーターは学校支援本部ごとにいますか？

質問者C：学校ごとに小学校16校全校についています。中学校が8校中4校が希望して、4校について

います。

前 城：素晴らしいと思います。あとお二人くらい質問があればお願いします。

質問者D：10年間取り組まれてきて、校長先生も何人か変わったと思うんですが、校長先生によって温度差はなかったのかな、というのが1つ質問です。沖縄の場合、校長先生が積極的にやっているようなところは、一生懸命地域と協働しようということでやっているんですけども、校長先生が別の学校に異動してしまうと、その学校はなかなか続いてやれなかったりというものがあります。そういった部分はなかったのかな、というのが質問です。

あともう1点。先ほど、教員の面接の時に、市民が面接に入るというのを聞いたんですが、校長先生を選ぶときにも市民が面接に入るのか聞かせていただければありがたいです。

質問者E：社会福祉協議会に勤めております。今、那覇市ではコミュニティ協議会ということで、小学校区ごとの地域づくりというのをモデル的に取り組んでいて、その中で私たち職員もコーディネーターという特命の職員がいて、地域と学校を結ぶ役目を担うという形になっていますが、1つの学区があまりにも大きすぎて自治会の方々がたくさん集まって校区で取り組むという中で、那覇市の石嶺小学校あたりは苦勞してやっている状況です。システムティックにここまで積み上げているのには驚きで、今学校の中ではこの人がいるから回るみたいな、人ありきの動きが基本的にはあって、この人がいなくなったらというのを懸念しています。そういう意味で質問したいのは、先生が10年間働いていらっしゃるということで、これは那覇市では基本的には学校の先生方の輪番によって学校と先生の結びつきが難しいということもあるので、先生が勤務する体系ですね。採用のこともありますが、その仕組みを聞かせていただきたいです。

私は、久茂地小学校区に住んでいて、統廃合の真っ只中にあります。全国区の中でも統廃合が進んでいない沖縄県であります。統廃合の後に、この仕組みが始まったという話であります。今の久茂地小学校の流れで言えば、今でも隣の学校とのひずみが出てこないのかなと不安の要素があります。統廃合したときに、関係性にひずみが出なかったのか、問題が起きていなかったのか。そして、コミュニティ・スクールをやろうとした人は誰なのか、というのを質問したいです。

竹 内：最初の方なんですけど、確かに、他の学校なんですけど、たまたま今年校長会の専門部会で、学校運営協議会を取り上げる専門部会にいて、他の京都市内の学校にアンケートをとって見たことがあるんですが、やっぱり立ち上がって4年目、5年目の学校が成果が落ちていたり、課題が増えていたりするんですね。なぜなのかを話し合っていくと、やっぱり校長先生が異動していらっしゃることがその3年目か4年目くらいにあるんですね。知らない方がぽんと来たときに、やはりその地域の方との関係がぎくしゃくしたりとか、そういうところでちょっと課題が見られるというようなこととか。それからマンネリ化じゃないんですけど、色々頑張ってきたけど、あとちょっとどうしていこうかという停滞なところ生まれるのかなというのも話し合いました。確かにそういうのはあると思います。そういうのを聞いていると、もうちょっと根強く、長く、学校運営協議会を立ち上げてやっていく。地域と共にやっていくんだったら、もう少し長くこの学校でさせてもらえたらというのがあるという意見が言われています。

本校は、特別な状態で、この平成 14 年にコミュニティ・スクールを始めたときの校長というのが 2 つ前の校長で、開校の平成 7 年に教頭で教育委員会から来て、平成 8 年に校長になって 12 年間御所南で校長をし続けました。それまで研究がこのように続いていたので、どのタイミングでも変われなかったのかな、と思っていますけれども、ずっとやってきているので温度差はないんですね。また、平成 20 年に次の校長になった人が実は開校からずっとおり、教務主任、副教頭、教頭をして校長にあがったという人なので、これも温度差がなく、地域を知っている方なんですね。2 年間の校長をされて、教育委員会に行かれて、次私になったんです。私も開校からそれこそずっと抜けずに教頭までやって校長になったので、違和感など全然地域にはないんですね。これは教育委員会がどういうふうに考えていたのかは聞いたことはないんですけども、統合して 9 学区を一緒にやっていくためには、ぼっと来た人ではできないと思ってはったのかな、というのはあります。

先ほどの危惧ですね。温度差といいますか、何にも知らない人がやってきて学校運営したときにどうなるのかということが、ひょっとしたらあるのかなと思って、この私の後に、どうしたらいいのかなと思っているんですけど。もういないですよ。ずっといる人というのが。ほとんどもうメンバーは変わっているんで、どうしたらいいかなと思っているんです。それで、うちはないんですけど、やっぱり変わってきたてで、温度差とかそれは是正していかなければならないと思います。これは課題だと思います。

公募の面接は教員だけで、校長・教頭の管理職公募というのはないんですね。これはもう教育委員会指定になりますので、そこは選ぶことはできません。それから、先生の異動の配置もあるんですけど、だいたいの教員の配置は新採で 3 年、異動してきた者は 6 年と異動年限で決まっていますが、これは学校事情によって残ることができたりします。本校は大きな学校なので新採が 3 人ずつ入るんですね。その辺は、一度に期限通りには出せないで、ちょっとずつ出していくと、新採から 6 年目、7 年目のところまで残っていくので、その辺は一度に期限通りに変えると、学校が大変なのということとは考慮の上で異動は考えてもらっているというふうには思っていますが、そういうふうには決まっています。回答になるかどうか分かりませんが、地域はずっと変わらず地域であって当たり前ですけども、教員はいつかは変わっていくだろうというのは、どっかで地域の人たちは分かっています。だから、よそ者とかそういうことではなくて、いつかは変わるから、こうやって取り組んでいくと先生が変わっても自分たちはずっと自分たちの学校だという意識があるんですね。だからその時に来た先生を大事に一緒に学校はやっていかないとあかんっていうので、先生の学校じゃなくて自分たちの学校だというふうにこの取り組みを思っていらっしゃるんです。いつかきつと変わってしまう、でも自分たちの地域の子どもが地域の子どもであることは変わらない。だからそこに、地域の子どもを育てるために、先生は異動してきて地域の子どものために尽くしてくれはるんだな、というコンセプトなので、全然そこは違いますね。先生に対して何しているんだということではなくて。こういう取り組みをしていると、そういう意識が生まれてくるのは、私たちにとっていいことです。

コミュニティ・スクールについては手を挙げていません。うちからは。平成 14 年の時には、手を挙げていなくて、これは教育委員会から、「こういう取り組みがあるけど、指定やってみ

てくれないか」ということで始めました。でも何かつながっていたんだらうなとは思いますが。総合的な学習からコミュニティ・スクールに行くとスムーズですので、そういう意味ではスムーズだったなと思います。すいません。自主的に手を挙げたわけではありません。

前 城：前回の岡輝中学校と同じ点がありました。今の点です。校長先生が長期でいたということ。これを聞いたときに言う人がいます。「先生がいたからできたんだよ」これは違いますね。そのような先生がいないところはどうするのか。これは信頼なんですね。信頼は目に見えないから評価しにくいんですが、信頼という言葉は、これは先生の言葉を借りましたら、親同士の信頼関係、地域の信頼関係、そして先生と保護者の信頼関係。コミュニティ・スクールの中で長い時間をかけて信頼関係を作る。信頼関係を作るのは誰かといったら先生ではなくて、地域の方々なんです。地域の方々がそのインフラを長い間作って行って、そのインフラの上に時期とタイミングがガツンと来たときには上手くいくんですね。我々は我々ができることをやっていかないといけないです。今回、御所南へ一緒に視察にいった先生がこう言いました。「御所南に追いつくのは無理ですねえ」ある意味当たっています。御所南を一気に目指したら無理なんです。でも、どの学校にでも素地はあるんです。読み聞かせだっていいじゃないですか。我々の場合だったらスポーツ指導員はいっぱいいるじゃないですか。それをどうつなぎ合わせたらいいのか、どのように学校に提供していくのかというのが、我々に求められている課題なんです。できるところから今あるインフラを使う事が大切です。どの地域にも学校は平等にあります、人材もいます、それをどう使うかですね。

今日は本当にありがとうございました。